

欧 州 雑 見 (その3)

高 橋 武 雄

12. パリ寸見

10月11日10時、ロンドン空港出発、ドーバー海峡を越えて正午パリ空港についた。午後1時 Air France のバスにて Invalid につき出迎いの本多健一君と会い、パリ大学都市日本館に入る。昼食後本多君の案内で Versailles 宮に遊んで、夕方となり広大な庭園の見物を途中で止めて帰る。

翌12日、メトロにて Luxemburg 下車、ルクザンブルグ公園に入った。Luxemburg 宮の丸池の周囲には、大理石の等身像と花壇とが幾何学的に配置されて誠に美しい。さらに公園を出てパンテオンに入った。巨大な堂宇の内部は、美しい大壁画をもって飾られ誠に壮麗である。さらに地下室の墳墓を案内人の導きによって見た。ベルテロー、ボルテール、ピクトル・ユーゴー、ゾラ、ルーソウ等の永遠に眠るこの丘は、近代文化の故郷とも思われ懐しい限りであった。

さらにすぐ近くの St. Etienne 寺に入って美しいステンドグラスを見た。それから Rue St. Jacques に出て、古色蒼然たるパリ大学の建物に沿って下り Boulevard St. Michel よりセーヌ河岸に出た。対岸の Cité に立つ堂々たる大寺院 Notre Dame の内に入って、広い暗い裡に言いようもない感銘が与えられた。Pont Neuf より北岸に出てセーヌ河岸を歩く。マロニエの大木は繁り、河岸には露店の本屋、スケッチなどの店がつづいている。ルーブル宮に至ってルーブル博物館に入った。一階のエジプト、ギリシャの石像等を見て、2階の大画廊に上り絢爛たる名画に驚嘆した。

外に出て Tuileries 公園を通過してコンコルド広場に出た。周囲に仏国の大都市を象徴する女神の大理石像が立ち、南北に二大噴水塔があり、その中央にエジプトのオペリスクが屹立し、その広場を馳せる夥しい自動車群にはいささか度肝を抜く。西に向ってシャンゼリールの大通りが伸び、遠くエトアルの凱旋門を望む。誠に壮観である。東を觀れば、豪壮典雅なルーブル宮が控え、北面にはマドレーヌ大寺院、南面にはコンコルド橋を隔ててブルボン宮が莊重なる麗姿を現わす。セーヌ南岸を東に歩いて、カルゼル橋よりルーブル宮の内苑を通過してロアイヤル宮に入った。漸く日暮も迫ってきたが、苑内のベンチには子供達が嬉々と遊んでいた。

13. ドイツの旅

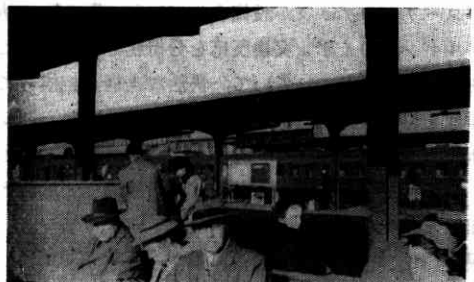
翌10月13日早朝、日本館を本多君に見送られて立

ち、地下鉄にてルクザンブルグ公園に出、タキシーにて St. Michel, Sebastopol, Strasbourg の大通りを走って Gare de Nord についた。午前10時発の列車は Compiègne, St. Quentin, Aulnoye にて停車するのみにて細雨の中を走り、ベルギー国内に入り、山水の景美しい Namur, 第1次大戦の有名な要塞 Liege などを通ってドイツ国内に入り、たまたま轢殺の事故がおこり約1時間半不時停車した。

Aachen の工業都市を過ぎ Düren に至ってラインの沃野が拓け午後5時半 Köln についた。駅にて稲垣茂樹氏(神戸市建設局長)と会い共に Düsseldorf に向い6時半ついた。駅前の Hotel Zum Klausner に入った。

翌日午前中、Düsseldorf の市を見物した。静かな Hofgarten の内で、子供に戯れる栗鼠、口笛を吹く手の上に止まる小鳥を見て、誠に美しい自然の姿を見た。

12時半発列車にて Duisburg 下車。駅前の荒涼たる爆撃の傷ましい跡を見た。さらに2時半発の列車にて Mülheim, Essen, Bochum 等のルール工業地帯を通過して3時45分 Dortmund についた。Mallinckrodt Strasse



第1図 Dortmund 駅のホームにて(正面は筆者)



第2図 Chemische werke Hüls A.G. 工場入口

の Hotel Industrie に入った。

翌15日朝、出迎いの車にて Recklinghausen の Marl

にゆく。約1時間車はルールの採炭地帯を走ってChemische werk Hüls A. G. についた。J. Oelsner 氏に面会し同氏の案内で研究所を見た。総員約500名、主任級科学者40名とのことであるが、竣成したばかりの10階建の新研究所の近代の実験室は、その設備の充実、施設の完備等において素晴らしいものである。天然ガス、コークスガス中のメタンの熱分解によるアセチレンの製造を世界にさがけて工業化し、ドイツの合成ゴム工業を確立したこの工場の将来への逞しい意欲には敬服した。正午典雅な食堂にて昼食の接待を受け、さらに分析関係の研究室を回って、昨春来日された Hans Theophile 博士と歓談して3時この工場を辞去した。

その帰りの車にて、ドルトムンドの Aplerbrück にある Institut für Spektrochemie u angewandte Spektro-



第3図 H. Specker博士とカントメーター (Camera)

skopie に H. Specker 博士を訪ねた。Specker 博士の案内で研究室を見た。ここにはほとんどすべての型式の最新のスペクトログラフが設備されていた。Specker 博士はアルギン酸のイオン交換反応を分析化学へ応用した興味ある論文を発表されていて、快活な人柄と相俟ってよき印象を得た。夕方、Prof. H. Kaiser 博士は自ら運転してホテルまで私を送った。両博士共 Münster 大学出身で、Kaiser 博士は物理化学専攻にて、水島三郎教授とは知己とのことであった。

翌16日、9時45分の急行に乗り、正午 Köln についた。大寺院 (Dom) の前の Dom Hotel に入った。

昼食後大寺院に入る。ステント・グラスは美しく輝き、室内も案外明るく、正面の礼拝堂は燦然と金色を放って荘重華麗であった。午後3時、出迎えの車にてライン川対岸の Weidenpesch にある Glanzstoff-Courtoalds GmbH に行った。所長の Fremery 博士、Koblitz 博士とに会ったが、工場見学はむずかしいので、H. Kiessig 博士のX線回折による繊維構造の研究室に案内された。Kiessig 博士は Hess 教授門下で、桜田一郎、祖父江寛、友成九十九氏等とは知己とのことであった。この工場の主製品はヴィスコース・ダイヤコードであるが、各種合成繊維の各種処理による繊維構造の変化について詳細説明された。5時、辞して社の車にてホテルに送られた。

夜ホテルの窓よりラインの流れを眺め、対岸の美しい

照明、高く懸れる仲秋の名月に感激の晩を送った。

翌17日朝、ホテルのロビーにて桜根吉之助博士(大阪市立大学附属病院院長)に会い、9時出迎えの Prof. M. Pestemer と共に Leverkusen にある Farbenfabrik Bayer A. G. に行く。正面事務所にて桜根氏と別れ、Pestemer 博士の案内で、まず本館にある製品陳列室に入って美しく並べられた染料、医薬、合成ゴム、合成樹脂、皮革剤、染皮剤、合成繊維 (Perlon)、酢酸人絹、農薬、写真(アグファ)等を見た、ついで工場内を自動車を走らせて見物したあと、中央研究所の機器関係の研究室を見た。11時半、ホールにて工場のカラー映画を見てから、本館前にある豪華な大食堂にて Pestemer 教授より昼食の接待



第4図 Farbenfabrik Bayer A. G. にある元社長の Duisburg 邸宅

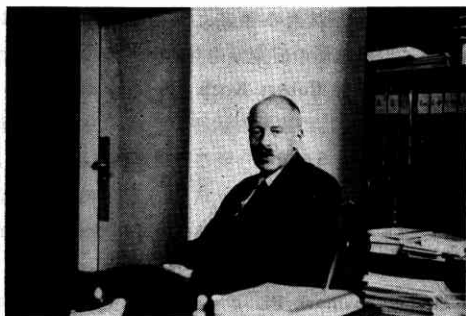
を受けた。食後 Duisburg 邸の日本庭園や緑の公園の内を散歩し、最近竣成したばかりの約10階の近代的研究所に案内された。実験設備の完備せることは誠に驚くべきものである。この研究所の元素分析室で、有機物酸素分析装置の発明者である Unterzucker 博士に会った。博士は訥々と日本の元素分析研究者より贈られた文献を示して、自分もレプリントをお返しに送っている旨私に語った。

それより Pestemer 教授の案内で、車にて大寺院の隣りの地下室にある旧ローマ遺物の Mosaic Dionysus を見てから、さらに E. Leybold's Nachfolger A. G. に行った。技師長の Karl Hecht に会い、試作研究室を見学した。この会社は真空ポンプの製作で古くから有名であるが、最近、自記式ポーラログラフ、分子模型、教材用実験装置等をつくっていた。



第5図 Bonn 大学化学教室とケクレの銅像

18 日, 10 時発の列車にて桜根博士と共に Bonn に行く。桜根氏と別れ, 黄色く色づいた葉の繁った並木道を上ってボン大学に至り, 新築の物理化学教室に Prof. Stackelberg を訪ねた。教授は電気化学研究室を主宰し, ドイツにおけるポーラログラフの大家であるが, 極めていんぎんなる態度にて研究室をみずから案内された。接



第 6 図 Bonn 大学物理化学教室における Stackelberg 教授

触水素波の研究 (氷醋酸中で Dipyrindine, Oxine), Ca, Ba, Sr のポーラログラフ分析 (50%アルコール中) の研究等を見てから, X線研究室, ガス遠心分離装置 (UF₆) などの設備を見た。午後 1 時半教授とバス停留所で別れて, 駅に戻り 2 時半発の列車にてフランクフルトに向った。

ライン川の兩岸の山々は黄色く, 川を上下する細長い石炭船のフナバタは赤く, 碧い水面の色と相映じて, 誠に印象的であった。5 時半フランクフルト中央駅につき駅前の Savoy Hotel に入った。

翌 19 日 10 時半, 例によって Dr. R. Bock みずから車を運転して迎えにきた。Mein 河に沿って走り約 20 分で Farbenwerke Hoechst A. G. についた。まず歴史的な煉瓦造の旧本館を見て中央研究所に行き Bock 博士の案内で分析関係の研究室を見た。ここではポーラログラフ, 赤外, 紫外分光計の外, X線回析装置 (Pb, Zn その他の定性・定量) が盛んに用いられていた。正午 Bock 博士および Jur. H. Behr 氏 (日本に生れ, 父は西川虎之助博士) と旧本館にある美麗な食堂で昼食の接待になり, それより 12 階の新築本館に入り 1 階の美しい陳列室を回り, 屋上に上って工場を展望した。Mein 河は南を静かに流れ, 東西は緑の野原である。工場の建物は多くは赤煉瓦造であるが, 目下建築中のものには, 合成繊維研究所, 可塑性研究所のいずれも近代的大建物がある。

午後 R. Krämer 博士の案内で, Bock 博士と共に自動車にて工場内を巡覧した。染料工場, ペニシリン工場 (ドイツ最大), 医薬品工場, 醋酸ビニル工場, ブタノール醋酸ブタノール工場, 硝酸工場, 電解工場等には入って見ることができた。メタンの塩素化, 石油の熱分解によるエチレンよりポリエチレンの製造 (Ziegler 法採用), テリレン製造等の工場は建設中であった。

翌 20 日早朝, 駅前の PAA で 24 日 Wien 行きの申込みを済ませ Bock 博士の運転でフランクフルトの見物をした。まず毎年メッセの行われる Messe Gelände, 再建途上の大学, 旧 I. G. 会社の本社の Hoch Haus, Kaiserhaus, Goethehaus 等を見た。



第 7 図 旧 I. G. 会社本部の Hoch Haus (フランクフルト) (現在米軍使用中)



第 8 図 Messes Gelände (フランクフルト) と Bock 博士 (左)

午後 1 時発 Frankfurt 発にて出発, 約 2 時間でハイデルベルヒの近代的な中央駅についた。市電にて Bismark Pl. に出て Hotel Bayrischer Hof に入った。小憩のあと Kornmarkt まで出て, さらに登山電車にて Alt Heidelberg Schloss に上った。古城に続く公園の中を散歩し, 明日の再遊を期して夕方ホテルに帰った。

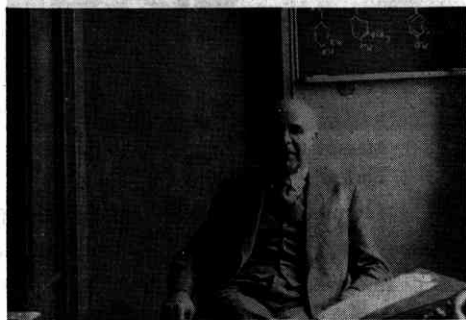
翌 21 日 Friedrich Ebert Pl. にある Bunsen 像の颯爽たる英姿を見て登山電車にて頂上の Königstuhl に上った。全山黄色をもって色どり, Necker の碧き水は古城の下を流れて誠に絶景である。登山電車にて古城に下り一般観覧者と共に古城の内を見物した。

午後は電車にて Schwetzingen 宮に行った。その広大な内苑には紅葉せる大木の美しい並木, 美しい Arion の噴水池, 蒙古風の廟 Moschee, 浴場, Apollotempel, 支那の石橋等があって誠に南ドイツの秋の美しさを満喫することができた。

翌 22 日朝, 電車にて Mannheim に行き, さらに市電にて Badische Anilin- & Soda-Fabrik A. G. (BASF) に行く。ライン川の鉄橋は霧深くいささか秋風寂莫の感であった。日本通の Karl Hamel 氏に面会し, 中央研究所にて A. Kirsch 博士に会って, 博士の案内, Hamel 氏の

通訳にて染料、可塑物、物理の各研究室を見た。この研究所は Oppau のアンモニア合成研究所と合して総員約 1,000 名、竣工したばかりの近代的な 5 階の建物の内部は誠に完備せる研究設備を擁している。ドイツ工業化学界の至宝 W. Reppe 博士の統率の下に数多の独創的な研究が進められている。豪華な食堂にて昼食の接待になってから、Reppe 反応の研究の殿堂である中間試験工場を見た。幾十の高圧連続反応装置が両側に立ち並んでいる様は誠に壮観であった。さらに車にて工場内を巡覧してから、午後 4 時過ぎ BASF の車にて Autobahn 上を快速に走って Hotel に帰った。

10 月 23 日朝、Friedrich Ebert Pl. にある古い化学教室を訪ねた。かつて Bunsen が数十年間研究を続けたこの歴史的な建物はなお学生実験室として使用されている。Freudenberg 教授に面会を求むると、対岸の新教室とのことにて、早速女子の大学院学生の同道にて Friedrichs Brücke を渡って案内された。二年前竣工したこの化学教室は近代的な明るい地下 1 階、地上 2 階の建物で正面 2 階には化学教室の生んだ化学界の巨星、Bunsen, Kirchhof, Kékulé, Victor Mayer 等の写真、筆跡などの外、著名な化学者の手紙など陳列されていた。70 歳の



第 9 図 フロイデベルグ教授
(ハイデルベルヒ大学化学教室)

フロイデベルグ教授はなおリグニンの研究にカクシャクとして熱情を傾けていて、その研究は Coniferylalcohol を水素中で重合させてリグニン様固体を得る研究、ペーパークロマトグラフィーによるリグニン分解生成物の研究、放射性 Coniferylalcohol を用いて諸化学反応の研究など多岐にわたっていた。

フロイデベルグ教授は約 40 年前ベルリン大学にあったとき、たまたま来独した故長井長義教授の講演をきいたことを語り、日本の化学者に対し関心とくに深く、私に長井教授の写真を入手したい（できればその他の日本の化学者の写真も希望）旨述べられた。

それよりホテルに戻り 12 時 Heidelberg HBH 発にて去り、午後 1 時半 Darmstadt 駅についた。電話連絡し、出迎えの車にて E. Merck A. G. に行った。ここにて私は“Die Cerimetrie”の著者 W. Petzold 博士に会うことができた。C. Fuhrmann 博士の案内でまず新築の Kontrol

Laboratorium に入った。主として物理化学、分析化学に関する最新の研究設備をもち、極めて快適なエアー・コンディションを施した誠に近代的な研究所である。次に新式の試薬製造工場を見た。一つの建物が八つの単位工場に分れ、各単位工場にはそれぞれ真新しい化学機械が設備され、この近代的な明るい美しい建物は誠に世界最高の純正試薬の製造にふさわしいものであった。さらに旧研究所の研究室を見て、サロンにてたまたま来社の Institut Robert Koch (Berlin) の所長 H. A. Gins 教授夫妻と共に茶菓の歓待を受け、午後 5 時車にて駅まで送られ、5 時 18 分発の列車に漸く間に合い、6 時 20 分 Wiesbaden HBH についた。駅前の美しい照明をつけた噴水を見、街を見物しつつ Rhein Str. の Taunus Hotel に入った。

翌 24 日朝 Bismark Pl. より静かな公園の中を歩き、Kapellien Str. にある Chemische Laboratorium Fresenius を訪ねた。約 100 年前、R. Fresenius が開いたこの



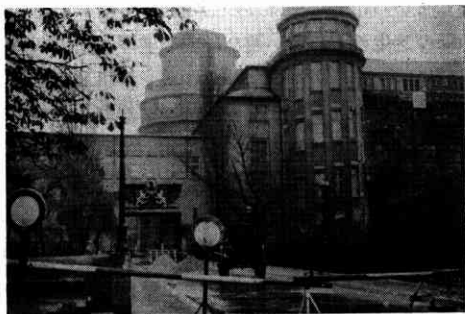
第 10 図 100 年前 R. Fresenius の建てた実験室
と W. Fresenius 博士 (孫)

分析化学専門学校は現在孫の W. Fresenius 博士の手によって経営され、同時に Z. für analytischen Chemie の発行も続けられ、誠に世界の分析化学のメッカとも称すべきところである。第 2 次大戦で校舎の半ばは破壊されたが、その跡には近代的な建物が新築されていて学生（2 年間で修了し、学生数 120 名）の実験に充てられ、旧屋は依頼分析に用いられていた。午前 10 時半 Fresenius 教授の見送りで Wiesbaden を立ち、11 時 20 分 Frankfurt HBH についた。

12 時半駅前の PAA よりバスに乗り Wien に行くべく空港に向った。

10 月 30 日、オーストリア国境を越えて私はドイツに入った。Salzburg からの雪は Roseheim に至って雨となり、午後 2 時 45 分 München BHB についた。新築の近代的な駅の 1 角にある Bundesbahn Hotel に入った。

翌 31 日朝、細雪の中を電車にて Ludwigs Brücke にて下り、Isar 川岸にある Deutsches Museum に正 9 時開場を待って入る。この世界に有名な工業博物館は、採鉱、冶金、機械、動力、電気、紡織、土木、交通等の各種工業について数多の実物陳列があり、さらに物理、化



第11図 ミュンヘン工業博物館

学に関しては古今の実験装置が集められ誠に驚異すべきものである。特に興味深いのは、地下の岩石を穿ってつくられた、石炭、石油、岩塩、鉱石等の採掘現場そのままの陳列であった。ドイツ工業の発展の源泉はこのミュンヘンの工業博物館に関係なしとはどうしても考え得られない。

次に Prinzreagenten Str. にある Haus der Kunst の西半を占めている Bayerische Staats Gemäldesammlung に入った。ここにてラファエル、ダヴィンチ、ボッチチェリー、チントレット、チチアノ、ルーベンス等の傑作を見た。

午後 München 大学を訪ねた。戦災の跡の修復が終ったばかりで化学教室を尋ねても要領を得ず、去って Theresian Str. にある Technische Hochschule の化学教室に H. Goldschmidt 教授を訪ねた。ここもほぼ戦災の修復が終ったところであるが、化学教室は新築の近代的な建物で、その玄関の廊下には、ノーベル賞に輝く Wieland 教授と Hans Fischer 教授との胸像が立っていた。Christian Futz 博士の案内で有機化学研究室を見た。放射性同位元素を用いた有機化学の研究が盛んに行われていて、放射性ペーパークロマトグラフィーなど興味深い。それより Maximilian Pl. にある Liebig の銅像を見る。学都ミュンヘンの誇として永遠に記念されていることは誠に印象深い。夕暮に至り戦災のままの悲惨な旧王宮 (Residenz)、中世紀の壮麗な姿のままの市庁などを見てホテルに帰った。

翌 11 月 1 日午前 9 時発の列車にてミュンヘンを立ち

第12図 ゴルドシュミット教授
(ミュンヘン工科大学化学教室)

ほとんど落葉した林と小川との淋しい冬景色を眺めつつ Augsburg, Ulm, Geising にて停車せるあと、11 時 50 分 Stuttgart HBH についた。下車し駅近くの Neures



第13図 リービッヒの銅像

Schloss を見る。戦災を受けた廃墟の前に美しき大理石の女神の像が残り、かつてのウィッテンベルヒ王国の壮麗な王宮を美しい彫刻の残った壁によって偲んだ。さらにすぐ南の Altes Schloss は大半修復されて Württ. Landes Museum となってドイツの古代の石像・木像・刀剣・木彫等の遺物が陳列されていた。さらに Schiller Str. の Staatsgalerie に入って多数の中世紀のイタリア絵画と共に Rembrandt の傑作、Fuerbach の美しい作品を見た。

午後 3 時駅に戻り特急“Morzert”に乗り 3 時半発車、4 時 50 分 Karlsruhe HBH についた。駅前の Schloss Hotel に入った。

翌 2 日、午前 8 時 47 分発の特急“Schauinsland”にて瑞西に向った。すでに霜は地面を被い、葡萄島とリンゴ林とは寂然たる冬姿であった。Basel にて瑞西の列車に乗り換え 11 時半発車し、美しい溪谷の間を走って Bieler See の岸に出てその湖岸を走り、Lac Neuchatel の美しい湖景を眺め、さらに Lausanne に至って Lac Léman (ジュネーブ湖) に達し、その北岸を西に向って走って遂に午後 2 時 40 分 Genève の Gare de Cornavin についた。(ジュネーブ滞在記は前に述べた。)

14. オーストリアの旅

10 月 24 日、午後 1 時 45 分フランクフルト空港を出発した PAA 機は約 1 時間で München 空港につき、3 時 10 分出発、美しき碧き Donau 河が、紅染むる山々の間を延々と蛇行せる様を脚下に眺めて午後 4 時 Wien の空港についた。バスにて都心のオペラ座横のエヤーターミナルに至り、歩いて Hotel Astoria に入った。

翌 25 日朝、Friedrich Str. の Reis Büro にて Wien-Graz-Salzburg-München-Stuttgart-Genève の回遊券を注文し、Karl Pl. から地下鉄にのり Schönbrunn に行った。

Schönbrunn 宮の大きな並木も黄色に染って誠に美しかった。偉大な女傑 Maria Theresa 皇后の豪華な生活

の跡を偲んだ。庭に出て海神の噴水池を経て、Glorietteまで上ったが、生憎の霧のためウィーンの町々を展望することができなかった。再びウィーン市内に戻って、かつてのバプスブルグ家の宮殿であった Hofburg を見た。華麗な State Apartment の部屋に入り、その盛んなりし日の昔を偲んだ。

午後 Tierärztliche Fachschule に Zacherl 教授を訪ねた。教授は微量分析法の最高権威で、長年 Microchimica Acta の編集を続けてきた人で、誠に温厚な老紳士である。研究室、学生実験室、講義室などを案内されたあと、私は暫く歓談し、ウィーン大学の Hecht, Tech. Hochschule の Strebinger, Graz 大学の Lieb の各教授への紹介を煩わした。

午後5時 Zacherl 教授みずから車を運転してホテルに私を送った。同夜ホテルに近いオペラ座 (Opern) に入って魔笛 (Die Zauberflöte) の素晴らしい演技と美しい音楽とに驚嘆した。

翌26日朝 Tech. Hochschule に Strebinger 教授を訪ねた。H. Weisz 博士の案内で学生実験室および微量分析研究室を見た。相当多数の学生を収容し学生実験室は塩酸の煙で充満し日本の大学と同様老朽実験室である。

さらに Währingerstrasse の II Chemische Universität Laboratorium を訪ねることができた。所長の F. Wessely 教授に会ってから Hecht 教授に会い、研究室を見た。目下河水の痕跡成分の分析の研究を行い、イオン交換樹脂を用いてUの定量法を研究していた。教授は微量珪酸分析において塩入松三郎博士の研究の貴重であることを語った。さらに H. Balczó 博士の案内で Beckman 自記分光計 (DK), 紫外吸収分光計 (Unicam), 焰光分光計 (Beckman), 電量滴定装置 (Metrohm) 等の分析機器を揃えた研究室を見た。

午後 Kunsthistorische Museum に入って驚くべき美術工芸の宝庫を見た。さらに Hofburg 中の Volkes Kunst Museum に入って東西古今の繊維工芸、武器、彫刻、楽器等の夥しい多数の陳列を見た。広大な各室には殆んど人影もなく、看守のツレヅレに引くピアノの音が静かに聞えてきた。

夜再びオペラ座に入って歌劇サロメを見た。

翌27日朝, Belvedere 公園を散歩し、10時開館を待って Oberes Palace に入り、オーストリア 19, 20 世紀の名画を見た。私はここで Waldmüller, Amerling, Hans 等美しい画に驚嘆した。それより Süd Bahn に出て午後 12 時半発の列車にて Graz に向った。Neunkirchen より Semmering に至る間、白い絶壁に紅葉が点綴して美しかった。午後5時に Graz HBH につき直ちに駅前の新築の Hotel Daniel に入った。

翌28日まず市電にてグラツの旧市を回り Geidorf Pl. にて下り公園を通過して Schlossberg に上り美しい眺めを

満喫してから市電にて郊外の Eggenberg 宮に行った。広い緑の芝生の上に鹿が遊び、立ち並ぶ大樹は紅葉を粧い、誠に美しい。かつてマリヤ・テレサ皇后の滞在したこの宮殿の内部はケンランではないが端麗である。皇后の支那芸術に対する嗜好を、Schönbrunn 宮と同様この宮殿においても十分知ることができた。

午後再び旧市に出て白壁の美しいオペラ座より続く公園 (Stadt Park) を散歩した。紅葉と黄色とに色とりどりの樹々の下に緑の芝生に抵がり、栗鼠が馴々しくベンチの上を走ってパン屑を喰べている様は誠に平和なものであった。



第14図 グラツ大学 (オーストリア)

翌29日朝、大学の医化学教室に Hans Lieb 教授を訪ねた。M. Hochenegger 博士の案内で Pregl-Laboratorium を見た。微量分析法の開拓 Pregl 教授の名を冠したこの実験室は戦前より世界の有機化学者を集めて微量分析法の講習を行ってきたが、戦時中止せるも戦後再開され年4回 (1回, 4週間) 開催されている。さらに Tech. Hochschule の Institut für Biochemische Technology' Lebensmittel & Mikrochemie に G. Gorbach 教授を訪ねた。教授の案内で驚くべく小さいいろいろなガラス器具を見て、故 Emich 教授の伝統をつぐ微量実験法研究の真髓に触れた思いがした。教授は誠に堂々たる体軀と快活な気質の持主であるが、足が多少不自由であるのは誠にお気の毒である。午後2時45分発の列車にて Graz を去り Bruck より Mur 河に沿って下り、美しいオーストリアの山村を過ぎ8時 Salzburg HBH につき、Hotel Bayerische Hof に入った。

翌30日朝細雨の中を Salzach 河にかかれる Staatsbrücke の上に立った。兩岸に連る家、南側の丘に聳える Hohensalzburg 城、北岸の Kapuziner Berg にある古い修道院など誠に印象的である。そのあと、Domplatz に出て Residenz に入って、かつてナポレオンの泊った部屋、仏墺戦争のときビスマルクの署名した部屋などを見た。

午後12時40分発の列車にのり München に向った。Salzburg の市をはずれると雨は遂に雪と化した。München の近くに至って、再び細雨となった。2時45分 München HBH についた。(以下前記ドイツの旅)

(1957. 6. 16)